Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第421号
2022年03月号
パリ通信
第123号

再考・リーダーとは／／
再読・「１９８４」＆「NOW」

「年々歳々花相似たり歳々年々人同じからず」

写真は私の散歩道「春木径（みち）」の桜並木です。老木だからこそ力一杯に咲いている姿を見ます。爛漫にして寂しさを感じます。年々歳々花相似たりとも終末を思う。
歩きながら考えたこと２題を記します。

１、リーダーとは

現役時代にリーダーとは何か、その使命と機能は何かを知りたくて沢山の本を読み、研修を受けた。殆ど忘れてしまったが、一つだけ覚えていることがある。
それはリーダー「かくあるべし」と、極めて簡潔な説明であった。
英語のリーダー・LEARDERの中にその機能は含まれている。以下は拙著より一部改訂して引用した。

リーダーは一挙手一投足において周りに影響を与えています。リーダーは構成員（社員）に人格的影響を与えながら、組織目標の実現に向けて率先垂範して行動する人です。更にリーダーは組織を調和的かつ統合的に人的資源を効果的に活用する任務を負った人である。
部下の育成に関してリーダーが果たすべき機能は何か。米国の通説ですが日本にも当てはまります。それはLeaderの文字の中に含まれています。

① l　listen　　聴くこと、hearではない
② e　explain　　説明すること

③　a　assist　　援助すること
④　d　discuss　　論議すること,情報を共有すること
⑤　e　evaluate　　評価すること,認めること
⑥　r　response　　応答すること,期待にこたえること、責任を果たすこと

①は聞くにあらず傾聴することです。
②はよく説明し必要なときは納得いくまで④論議することです。これにより情報の共有化ができます。又リーダーは「コミュニケーションの決定権は受け手にある」ことを知り自分の説明が相手にどのように伝わったかを確認する必要があります。
③援助は相手のレベルに合わせて行います。過保護にならないように。やりすぎるとリーダーが仕事を抱え込んで部下は育たず共倒れになります。
④かつては部下が上司と論議することはタブーでしたが、今は情報が上下左右に頻繁に流れていますので上司が常に正しい判断をしているとは限りませんから論議は個人にも組織にも貴重な成長の要因です。
⑤評価すること。褒めることとフィードバックすることの両方が必要です。人は褒められた所で成長します。怒られて人が成長することはありません。怒られた人は不承不承やっているだけです。フィードバックは軌道を外れた人には厳しく方向転換を指示しなければなりません。これは見逃してはいけないことです。フィードバックできない人はリーダーになれません。
⑥期待に応えることとは責任を果たすことです。responseの名詞形はResponse.
それに能力abilityと結合するとResponsibility(責任）となります。責任とは社長から与えられた任務を期待通り果たすことを通して応答すること、社長から期待されていること、それ故に権限が与えられています。責任があるということは大きな恵みです。権限と責任は表裏一体と言われるのはこのような応答関係があるからです

①から⑥はすべて相手の存在価値を認めるストロークです。人はストロークを求めて生きています。
声を掛け合い笑顔で挨拶をし、励まし合って工夫して、次の人のための段取りをして能率をあげることがリーダーの役割です。そして忘れてはならないのが率先垂範する権限がありフィードバックする権限と責任があるのです。査定からフィードバックはできません。人は温かさの中で育ちます。（拙著「わたしの幸せあなたの幸せ」p116~118)

今回はこの機能の内、DをdiscussからdirectにDに変えることにした。日本の風土には議論はなじまないと感じていた。ここでいうdirectとは方向に導く、方向を明確に示すという意味である。方向とは企業経営であれば「理念」に舵を取ると言うことを意味する。国家であれば憲法ということになるだろう。

我が国の現政権は憲法改正に向けて本格的に舵を切るという。「見えるなら、よく見よ。よく見えるなら、じっと見よ」よく見ていかねばならない。

２、「１９８４」とNOW

私は今、ジョージ・オーウェルの「１９８４」を読み返し始めたばかりです。
「戦争は平和なり。自由は隷属なり。無知は力なり」という、某国某党があるという。
ある人物が登場してくる。その紹介文の冒頭「彼は第一級反逆者であり、党の純潔を汚した最初の人物であった。それ以降に起きた、党に対する犯罪、あらゆる背信行為、破壊工作、異端思想、逸脱行為は、どれもこれも彼の教えから直接生じたものばかりだ」（角川文庫版p21、この本は全体で479ページある。この引用は物語の導入部分の紹介文である）

今、進行している戦争当事者の国民の皆さんの患難と苦痛はニュースを見るたびに心が痛む。そして一日も早い停戦を願う。そして、見る者には学ぶことが多い。学びは立場によって異なるが、侵略を始めた国が滅んだとう法則的な体験を持つ国民は特に学ぶべきである。

戦争がどうして始まったか？色々な背景はあるにしても、最後の決断は一人の個人であることを私は思い知った。それは独裁体制であろうが、民主主義体制であろうが変わらない。最後のボタンを押すのは一人の個人の決断なのだ。その個人の正しい良心の核心がなければ、最後のボタンは押されてしまう。その一人の個人を抑制する4人なり、12人が居たとしても、その集団が正しい良心を目覚めさせなければ、ボタンは押される。命懸けでボタンを押す者もいれば、ゲームを楽しむようにボタンを押す者もいる。

一人の女性が命懸けで一枚の紙を掲げてテレビ画面に出てきた。小説の世界ではない。
それは、3月15日正午のNHKニュースであった。午後7時には更に詳しく報道された。
ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を巡り、プーチン政権の意向に沿った報道を続けているロシア国営テレビで「ブレーミャ」（ロシア国営の「第1チャンネル」の看板ニュース番組）、ニュース番組の放送中に突然、職員の女性がスタジオで反戦を訴えるという驚異的な内容であった。
キャスターが、欧米による経済制裁についてのニュースを伝えていたところ、手書きの文字が書かれた紙を持った女性が突然スタジオに入ってきた。
紙には「戦争反対」という英語とともにロシア語で「戦争をやめて。プロパガンダを信じないで。あなたはだまされている」と書かれていた。
女性が「戦争をやめて」と繰り返し叫んでいたところ、放送は突然、別の映像に切り替わった。
女性はこの国営テレビ局の編集担当の職員で、マリーナ・オフシャンニコフさん。

彼女の感性の叫びであったと私は思う。彼女の覚悟と勇気は、ロシアでは狂気とも思われるだろうが、事実を覆い隠すことをこれ以上続けることが、どんなに苦しかったであろうか。彼女は自らの命と交換したと私は思う。
彼女は事前にメッセージをSNSに書き残している。1分30秒にまとめられている。覚悟のほどが窺われる。悲壮だが勇敢な段取りが読み取れる。

「いまウクライナで起きていることは犯罪だ。そしてロシアは侵略者だ。侵略の責任は、ただ一人の道義的な部分にかかっていて、それはプーチン大統領だ。私の父はウクライナ人、母はロシア人で、敵対したことは一度もない。私の首にかかるネックレスはロシアがこの同胞を殺し合う戦争を直ちに止めなければならないという象徴だ。兄弟国である私たちはまだ和解できるはずだ。残念ながら私は過去何年もの間、『第1チャンネル』でクレムリンのプロパガンダを広め、 今はそれをとても恥じている。テレビ画面を通してうそを伝えることを許してきた自分を恥じている。ロシアの国民がだまされるのを許してきたことを恥じている。すべてが始まった2014年、クレムリンがナワフリヌイ氏を毒殺しかけたとき、私たちは抗議集会に行かず、この非人間的な政権をただ黙って見ていた。そして今、世界中が私たちに背を向けている。今後10世代にわたる子孫はこの同胞による戦争の恥を洗い流すことはできまい。私たちは思考力があり、賢いロシア人だ。この暴挙を止めるには、私たちの力しかない。抗議集会に加わってほしい。当局は全員を拘束することなどできず、何も怖がることはない」

個人の力は空しいように思われるが、偉大でさえある。
神の支配を知る正しい良心がない者がトップになった時、何が起こるか。そして、時に及んで正しい良心が呼び起こされ覚悟を決める人が現れる。
時間が経過すると歴史はいかようにも書き換えらる。しかし、この瞬間は全世界に知れ渡ってしまった。小さな個人誌だが、ここに書き留めたい。（完）

お知らせ。

ベストピアでは昨年8月号から松山幸生先生の著作「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の写書を連載しています。ホームページのトップ、左に小見出しをつけてあります。それをクリックしてください。1000頁の大著です。身震いする大それた挑戦です。
「ヘブライ人への手紙」は旧約聖書と新約聖書の架け橋になる手紙です。イスラエルの歴史に興味ある方にも参考になるように松山幸生先生が解説をしてくださっています。
私は信仰の立て直しを目的として写書することを承諾いただき始めました。回を重ねるごとに、その深さと広さと重厚さに圧倒されております。幸いにも恵まれまして森容子先生のご指導を賜ることができ、正しく写書する努力を続けております。

次ページからは「パリ通信」です。

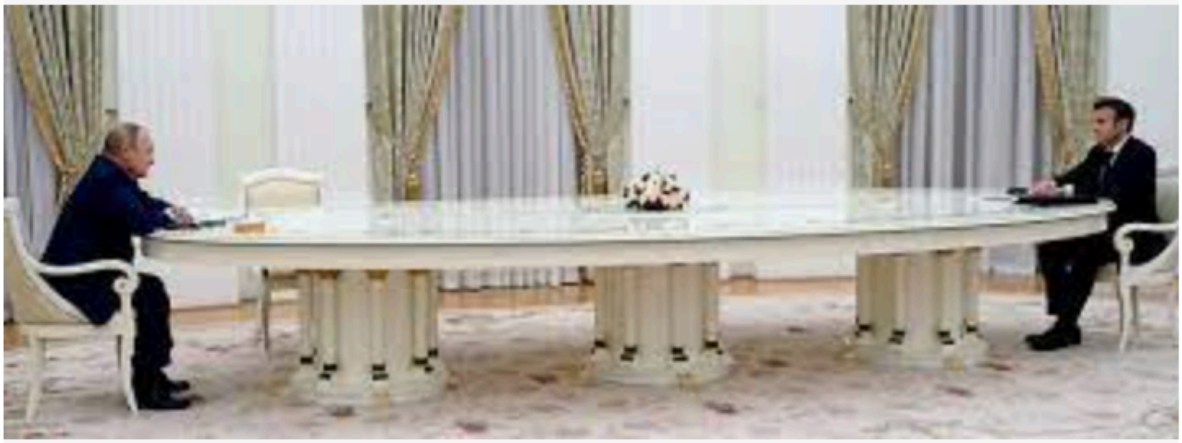
パリ通信　第123号

１、マスク解放

フランスは3月14日からマスク着用義務が解除される。例外として飛行機、列車、バス、地下鉄などの公共交通機関利用と病院、高齢者施設に限りマスク着用義務が続く。COVID 19 が始まって2年、マスク文化のないフランス人にとってマスク着用は受け入れ難い苦痛だった。裏表の見分け方、付け方を知らない人がほとんどで、マスク不足は中国に依存していた政策を見直す機会となった。早期ワクチン開発のおかげで、ようやくマスクから解放されるのは嬉しいがコロナ・ウイルスが消滅した訳ではない。この2週間でフランスの一日新規感染者数は7万を超え、増加傾向にある。オミクロン株変種BA2感染が数字を上げている。しかし、フランス政府は集中治療を必要とするコロナ重症患者数が下がり続けていること、83%のワクチン接種率(3回接種終了)を以ってフランスの集団免疫ができたと判断する、この２つの理由でマスク着用義務を解いた。併せてワクチン証明パスの提示も病院以外は不要になった。以前の生活に戻れる見通しがついたことになる。2020年3月15日に始まったフランスの都市封鎖、第5波までの病院逼迫、日常生活への計り知れない悪影響、心身共に世界中を蝕んだCOVID 19もインフルエンザと同じ扱いになろうとしている。本当に大丈夫なのか、もうしばらくはマスクを外したくないと思うのは日本人始めアジアのマスク文化の国々だけのようである。

２、しかし、コロナ禍を重視できなくなった本当の理由は、2月24日に始まったロシア軍ウクライナ侵攻である。

18日間続く爆撃で首都キエフがロシア軍に占領されるのも時間の問題になってきた。プーチン大統領は理由なき侵略をやめる気配がない。誰もプーチンを止められない。仲介に入る努力を続けているマクロン大統領だが、プーチンに翻弄されるばかりである。
マクロン大統領は2月7日クレムリンでプーチンと会い、ウクライナ侵攻しない約束を取り付けた。10mもあろうかと言う長い楕円形テーブルの端と端に座っての異様な会見。俺に近づくなと言わんばかりで、その映像はヨーロッパ中のニュースになった。



翌日2月8日にはウクライナのゼレンスキー大統領とも会見している。24日のロシア軍侵攻はまさかの出来事で、戦争勃発後も「人道回路」を交渉すべくマクロン大統領はプーチンと電話交渉を続けているが効果がない。

3月に入り、マクロン大統領は「欧州連合加盟国」(イギリスが脱退して現在27ケ国)をヴェルサイユ宮殿に招き、「ロシア軍ウクライナ侵攻」対策を話し合う緊急会議「ヴェルサイユ・サミット」(3月10日と11日の2日間)を開いた。欧州連合は一丸となってウクライナを支援することでは合意しても、一刻を争うウクライナの戦火を消す決め手となる手立てがない。フランスはルーマニア国境に軍隊を送り、EU上空に戦闘機を配置しているが、ウクライナ国内の戦闘に参戦することはしない。

ヨーロッパ各国共に経済的にロシアを圧迫しているが時間がかかる。陸続きのヨーロッパにとってロシア軍ウクライナ侵攻は他人事ではない。「ヨーロッパの穀倉地帯」と言われるウクライナ、フランスではすでに小麦や飼料の価格が高騰している。ヨーロッパのガス供給はロシアに40%を依存しており、輸入禁止の強い経済報復を行うことができない。フランスではガソリン1リットルが2ユーロ(270円)を超えている。

フランスは4月10日(第1回投票)と24日(決戦投票)の「大統領選挙」を控えている。ウクライナ侵攻がなければ向こう5年間のフランス国内政策に関わる重要な時期だが、候補者たちは通常の選挙運動ができない。ウクライナ侵攻の火消しがヨーロッパ最優先の課題である。
雪が降り、電気も食料もなく、ロシア軍の爆撃に脅えるウクライナ市民、破壊される建造物、18歳から60歳までの男子は総動員で武器を取り、家を失い子供だけを連れて国外に逃れる女性たち、21世紀の今日、絶対にあってはならない戦争が起こっていることに愕然とする。プーチンの愚行を一日も早く阻止して欲しい。